

カラー作品 / フランス映画

さよならの微笑

COUSIN COUSINE



東宝東和 (創立50周年記念) 作品

COUSIN COUSINE

〈キャスト〉

マルト……………マリー・クリスチヌ・バロー
 ルドビク……………ビクトル・ラヌー
 カリーヌ(ルドビクの妻)……………マリー・フランス・ピジエ
 パスカル……………ギイ・マルシャン
 ビジュ(マルトの母)……………ジネット・ガルサン
 ティアヌ……………シビル・マース
 サシー……………ジャン・エルペール
 ゴペール(ビジュの夫、ルドビクの伯父)……………ピエール・プレシス
 ネルサ(ルドビクの娘)……………カトリーヌ・ベルロール
 トーマ(ルドビクの父)……………ユベール・ジヌー

INTERPRETES

Marthe…………… Marie-Christine BARRAULT
 Ludovic…………… Victor LANOUX
 Karine…………… Marie-France PISIER
 Pascal…………… Guy MARCHAND
 Bijou…………… Ginette GARCIN
 Diane…………… Sybil MAAS
 Sacy…………… Jean HERBERT
 Gobert…………… Pierre PLESSIS
 Nelsa…………… Catherine VERLOR
 Thomas…………… Hubert GIGNOUX



製作……………ベルトラン・ジャバル
 監督……………ジャン・シャルル・タツシエラ
 脚本……………ジャン・シャルル・タツシエラ
 共同脚色……………ダニエル・トンブソン
 撮影……………ジョルジュ・ランティ
 音楽……………ジェラルド・アンフォッソ

PRODUCTEUR DELEGUE… Bertrand JAVAL
 REALISATEUR… Jean-Charles TACHELLA
 SCENARIO et DIALOGUE
 …… Jean-Charles TACHELLA
 COLLABORATION à L'ADAPTATION
 …… Danièle THOMPSON
 IMAGES…………… Georges LENDI
 MUSIQUE…………… Gérard ANFOSSO

笑の微笑

上映時間・1時間36分



「出逢い」

それは二人の間に共通の何か心を熱くするものが！

マルトがルドビクと出逢ったのは50才を過ぎた母親のビジュが再婚した日だった。親戚中が集まって、華やかだった宴もはて夕やみの中にそれぞれの夫と妻を待って取り残されたふたり。ぼくは新郎の甥です。ダンス教師です。ええ、知ってるわ。そんな自己紹介をして、ルドビクに誘われるまま幼い息子の前で踊ったマルトは、夫のパスカルとルドビクの妻カリーヌが、どこかバツの悪そうな顔で現われたとき余計な詮索をする気にはなれなかつた。マルトの夫への愛はとうに失せていた。だから、ルドビクが妻からパスカルあての手紙を持って彼女の勤める保険会社へ現われた

男は
さよならは人生だと言
女は
さよならが愛だと言っ



マルトの生き方にあなたは 何を見いだすだろうか。

華やかな妻がはて宵、ひとつの恋が生まれた。女は幼くない息子の母。男にも妻子がいる。女の母親の結婚でここになつた彼らは、いかにもフランス人らしい親戚づきあいの中で少年と少女のように胸ときめく恋をほくくみやがて決断のときを迎える。

いま、新しく生きる女へ共感の拍手が！

●全米で大ヒット

76年のアカデミー外国語映画賞、主演女優賞にノミネートされたこの作品は、76年度のアメリカおよびカナダにおいてフランス映画として最高の配収をあげた。従来の最高記録は74年に公開された「エマニエル夫人」だが、この記録を破るのは時間の問題といえよう。また、ニューヨークでは51週間連続上映をはじめ、全米主要都市では2年間のロングランをふくめ、現在も大ヒット上映中である。

- サンセバスチャン映画祭 銀賞
- 全米記者連盟 外国語映画部門 作品賞
- 最優秀女優賞(マリ・クリスチヌ・パロー)
- 最優秀男優賞(ピクトル・ラヌー)
- 76年度全米映画史協会選出作品



ときも平然としていたが、気味悪いのはあの日からのパスカルの変わりようだ。女と見れば片端しから手を出していた彼女に、まるで人が変わったように女たちと手を切り、誠実な夫の役を演じようとしている。「あの結婚でいここになった男の女房と寝たけれど、もう手は切った。ぼくは隠さないよ」告白さえすれば何もなかったも同然と考えている夫の無神経がマルトにはうとましい。

「新しい愛」

それは夫へ妻への抵抗という形で始まった。

夏が来て、親戚中がビジュの田舎の家に集まった。だが、結ばれて間もない老夫婦の愛は、夫ゴベールの突然の死で断ち切られた。葬式には、またしても一族が集まった。喪服で再会したマルトとルドビクは、いまやすつかり打ちとけ、それからの彼らは目を追う毎に親しさを深めていった。パスカルの嫌うブルーでデートをくり返し、これもまた彼の嫌いな帽子をルドビクに買ってもらった少女のようにはしゃぐマルト。結婚11年、1児の母とはとても見えない愛らしさだ。「お返しに、奥さんが大嫌いな柄のネクタイをプレゼントするわね」いまでも少年のように夢を追う3年に1度は職を変えるというルドビクと出逢つてからのマルトは、驚くほど陽気で積極的になっていった。ふたり分のお弁当を作つて彼を誘い、日曜日には、夫と出かけたレストランでルドビク一家とハチ合わせするように仕組む子供っぽい悪戯に胸ときめかすマルトには、罪悪感のかけらすらなかつた。

「真実の愛」

それは共に生きる人間同士として見つめ合ふこと。

親戚の娘が結婚して、一族が集つた日、妻の心が冷えたことを知るパスカルは酒に溺れて荒れに荒れた。そしてルドビクの優しさが病弱な妻に対する同情でしかないことに気づいているカリーヌは、悲しさと口惜しさにくちびるを噛んだ。酔ったパスカルを寝かし、マルトの家でパーティーのやり直しをするビジュ

愛に生きる新しい女マルトは この素晴らしいスタツプから生れた！

●ジャン・シャルル・タツシエラ(監督・脚本・台詞) ジャーナリストから脚本家として日仏合作の『忘れ得ぬ暮情』(56)、ジャン・テュビエ監督の『戦争の名譽』(61)などを手がけ、映画作家に転じ短編映画『去年の冬』で71年度ジャン・ピゴ賞など数々の賞に輝いた。この作品は監督として長篇2作目。

●マリ・クリスチヌ・パロー(マルト) 残念ながら賞はのがしたものの76年度アカデミー主演女優賞候補にのぼった大型新人。1944年パリ生まれで、伯父ジャン・ルイ・パローのオデオン座の一員として数多くの舞台を踏む。テレビドラマのヒロインから映画界入りし、この主演作以来、新しい女として、フランスで最高の人気を誇っている。

●ほかに「私のように美しい娘」(70)などで知られるギイ・マルジャンやジネット・ガルサンなどフランス映画界の名脇役が顔を揃え、彼らの洒落た演技はただ見ているだけでも楽しい。製作ベルトラン・ジャバル■音楽ジェラルド・アンフォツツ

知的に、さわやかに

そしてシンプルな着こなし キャリア・ウーマン

いまを生きるキャリア・ウーマンたちにとって美しく飾ることはもちろん、仕事をするという意味で着やすい、動きやすいといった機能的なファッションが求められます。そんな、ファッションをさりげなく、自然に着こなしているフランスの女たち。着る人の感性や、個性を生かした彼女たちのファッション感覚をこの映画からそつとあなたにお見せします。彼女たちのエスプリのきいた会話も楽しい。

やルドビクとその父たち。しかし、カリーヌの涙と目をさましたパスカルの怒りが、盛り上つた雰囲気をおち壊した。いまやマルトとルドビクの仲は親戚中が知っている。みんなぼくたちが寝たと思つていて。ならば、いままさらためらうことはない。いちどは、永遠に結ばれぬままでいようと語りあつたふたりだが、そんなことを誰も信じてくれない。土曜日の昼に会い、思いの限り愛をたしかめてマルトが洗い顔のパスカルと息子が待つ家に帰ったのは日曜の夜だった。一方、催眠療法を終えて退院して来たカリーヌは、夫の愛を取り戻そうと必死だった。はじめてデートしたレストランで食事して、ナイフクラブへ廻つた。でも、ふたりの間には、冷えびえとしたスキ間風が吹き抜ける。親戚中の大人を子供たちが招待したパーティーの日、パスカルはマルトの姉に怒りをふちまけた。「おれは隠してやつたのに、うちのやつときたら、大つぱらにやつてい」どこまでも自分勝手なパスカルには、マルトの姉も手上げた。数日後すつかりふさぎ込んだカリーヌは、家を出ようとしたものの、行くあてもなく泣きながら帰つて来た。そんな妻を、憐れと思ひながらマルトが忘れられないルドビクだった。

「愛の出発」

それは自分に素直に生きる女の旅立ち。

やがて、例年どおり親戚中が集まつたクリスマスの日、一族の好奇の目をものともせずマルトとルドビクは鍵をかけた部屋にとこもつた。残されたパスカルの心は怒りとあきらめで乱れ、カリーヌは悲しみのあまり自殺を計ろうとする。ベチカの火が赤々と燃える居間で、ビジュと若い恋人の奇術師が演じる余興がクライマックスに達したとき、皆の前にマルトとルドビクが現われた。さようなら皆さん、ありがとう。笑顔で子供たちを抱きしめたマルトとルドビクは、ふたりだけで手を取りあい、晴れやかに過去から旅立っていった。

●ピクトル・ラヌー(ルドビク) 1936年、パリ生まれ。職業を転々とし、64年に映画界デビュー。『暗黒街のふたり』(73)でジャン・ギャバン、アランドロンと共演、「限りなく愛に燃えて」(77)に出演するなど、最近フランスで人気上昇中の二枚目。また劇作家としても知られている。

●マリ・フランス・ビジェ(カリーヌ) フランスワ・トリュフォー監督の「突然炎のごとく」(62)で女優としての道を歩み始め、20歳の恋」(62)で主演女優となる。その後達者な演技を見せる彼女はハリウッドに招かれ、主演した「真夜中の向う側」が大ヒット。フランスの若手演技派からエキゾチックな国際スターに変貌している。44年生まれ。



4月上旬よりロード

ヒビヤみゆき座 (591) 5357

